

淡路島の方言語彙に関する研究  
—じゃがいも・さつまいも・さといも—

峪口有香子 岸江信介

A Study of Geographical-Dialect in Awaji Island  
—Potato, Sweet Potato, Taro—

Sakoguchi Yukako<sup>i</sup> Kishie Shinsuke<sup>ii</sup>

**Abstract**

In this study, we have analyzed the results of the survey done about the dialects around the Awaji island. This analysis was done by using GIS, which is a new tool to analyze the information scientifically in terms of time and space.

The purpose of my study is to clarify how the dialects of Awaji island have changed over time by comparing dialectal data shown in “Linguistic Atlas of Seto Inland Sea” (1974) with our latest data including 1999’s data.

A comparison between the results of these data was conducted by using the GIS, which has helped us find the change in the geographical range of the dialect. By using the GIS we can obtain a lot of useful details about the geographical range of the dialects; for example, we can see the effect TV has had on the spread of standard Japanese dialect to other areas. Also, we are able to discover more about the change or evolution of the language. I believe that studying the evolution of languages from the past to the present using geographical information, such as GIS, is extremely important in showing how the languages have changed and evolved.

---

<sup>i</sup> Doctoral Course Graduate School, Tokushima Univ., JSPS Research Fellow

<sup>ii</sup> Professor, Faculty of Integrated Arts and Sciences, Tokushima Univ.

## 1. はじめに

淡路島方言は、淡路島の淡路市、洲本市、南あわじ市の三方言を併せた総称であるが、禰宜田（1986）によると、淡路島の方言を3つの地域（北部、中部、南部）に分け、北部を河内・大和系、中部を泉州・和歌山系、南部を徳島系として、周辺の方言とのかかわりが深いことに言及している。いずれも言語伝播といった視点からその関連性について述べたものと思われるが、近隣周辺とのことばとの共通性があるほか、淡路島独自のことばもあり、淡路島方言の複雑な成り立ちが窺える。

また淡路方言は近畿方言に属するが、瀬戸内海方言をひとつのまとまりとし、その中での位置づけを論じた研究も多い。藤原（1976）は、瀬戸内海要地方言のひとつとして北淡町畑方言を取り上げ、その特徴を記述している。また、藤原（1999）は、瀬戸内海域を、人間の居住する125島を擁する一言語内「多島海域」とし、かつての舟運などの生業が、瀬戸内海方言の状態に影響を与えていることを指摘している。淡路島は、現在は本州四国連絡道路の神戸・鳴門ルートで本州・四国と繋がっている。大阪湾から瀬戸内海を西に進み九州に至る瀬戸内海路は、古代より西国の交通の大動脈となっていた。海路による交通は古くから盛んで、物流や人の往来に伴い、ことばもまた、相互に影響を受けてきたはずである。

本論では、藤原与一（1974）『瀬戸内海言語図巻』（以下LASと略す）追跡調査の一環として、2011年10月から2012年12月にかけて実施した瀬戸内海域での調査のうち、淡路島で得られた調査結果を用いて報告を行うことにする。以下では2012年調査と呼ぶこととする。

なお、同調査の質問項目は全体で約180項目に及ぶが、この中から「じゃがいも（馬鈴薯）」「さつまいも（甘藷）」「さといも（里芋）」の3項目について、今回、実施した調査結果をもとに分析を行うことにしたい。また、過去において当地域を対象とした調査があり、これらの結果との経年比較が可能である。以下では、これらの結果を併せて示すことにする。

## 2. 淡路島での方言調査

2012年度に実施した淡路島での方言調査で、通信調査（回答者に調査票を郵送し、その回答を得て分析する）が中心であるが、通信調査を補完するため、面接調査も一部実施した。通信調査は、峪口が進めている瀬戸内海島嶼部全域での調査で得られたものである。

第一次調査は2011年10月から12月にかけて回収されたデータ約500地点

分のうち、淡路島各集落の回答は 76 地点であった。

第二次調査は、2012 年 8 月以降、実施したものであり、瀬戸内海域全体で得られたデータは約 300 地点、淡路島分は 18 地点である。この調査では淡路島で面接調査も行っている。

第一次と第二次調査を合わせると、計 94 地点分のデータが淡路島から回収された。なお、この調査データをもとに岸江信介ほか編（2013）『淡路島言語地図』を公刊した。この報告では、上記の第一次・第二次調査で得られたデータをもとに大半の調査項目について解説を行ったが、一部、データの解説ができなかったものがあり、そのうちの重要と思われる項目を今回ここで取り上げる。

なお、淡路島における方言のリアルタイムの経年比較を行うため、過去に行われた淡路島を対象とした言語調査の結果も併せて取り上げることにする。

LAS は、老女・少女二層図を上下に比較対照した計 251 図からなる 2 巻の言語地図である。1960 年から約 5 年間にわたって、内海島嶼部 701 地点、沿岸部 141 地点、計 842 地点を臨地調査したもので、淡路島では 125 集落が調査対象となっている。本発表では、老年層の地図を電子化（再地図化）している。

また 1999 年合同調査は徳島大学・神戸松蔭女子学院大学・園田学園女子大学 3 大学合同で、1999 年 8 月 8 日から同年 8 月 10 日の 2 泊 3 日で行なわれたものである。調査地点は、淡路島全域 61 地点、調査対象者は、生え抜き（昭和 18 年生以上）である。調査結果は公刊されていない。以上の調査結果を随時比較し考察していくこととする。

### 3. じゃがいも（馬鈴薯）について

#### 3. 1 先行研究

次に語彙毎の先行研究をみていく。まず「じゃがいも」は 1598 年にオランダ船によってジャガタラ（ジャカルタの古名）から長崎にもたらされたが、全国に普及したのはアメリカから優良品種の持ち込まれた明治時代以降とされている。

また『日本国語大辞典 第二版』によると、栽培の盛んな東日本では、方言の種類が多く、分布も複雑である。その名称は、収穫にまつわる名称としてニドイモ（二度芋）・サンドイモ（三度芋）【収穫回数】、ゴシヨイモ（五升芋）・ゴドイモ（五斗芋）【収穫量の多いこと】、ナツイモ（夏芋）・アキイモ（秋芋）【収穫時期】、地名にまつわる名称としてジャガイモ・ジャガタライモ・オランダイモ・カライモ・ナンキンイモ・シコクイモ・キュウシュウイモ、外

国語に由来する名称としてカンプライモ・アップライモ【馬鈴薯を意味するオランダ語 *aardappel* から】、形状にまつわる名称としてアガエモ【表皮の色】、キンカイモ【禿頭のことをキンカと呼ぶことと関係して芋の形が禿頭を連想されることから呼ぶ】、人名にまつわるジャガタロ【ジャガタラにタロー（太郎）を添加した言い方】などに分類されるとする。また語源説をみると、新村(1944)は、馱馬の鈴のように実がなるから馬鈴薯と呼称されるようになったと指摘している。

江戸後期から、様々な文献にジャガイモが出てくるようになってきた。なお以下では『日本国語大辞典 第二版』等を参考とした。

- 『物品識名』（1809）「同国伊勢街なる柳田鼎蔵と云う者、一種の芋を贈れり。土俗之を咬吧芋（ジャガタライモ）と称す」
- 『救荒二物考』（1836）「馬鈴薯 和名 ジャガタライも、甲州いも、ちちぶいも」
- 『新聞雑誌 - 四一号』（1872）明治5年 四月「目今地味瘦たりと雖も麦と馬鈴薯（バレイショ ジャがたらいも）を生ぜざるなく」

次に国立国語研究所編（1984）『日本方言地図』（以下 LAJ と略す）第 174 図の「じゃがいも」を概観してみる。ホッカイドーイモ（鳥取県・福井県）、サッポライモ（福井県）、センダイイモ（岐阜県）、エチゴイモ（滋賀県）、ツルガイモ（岩手県）、カントイモ（愛媛県）、コーシューイモ（東海地方ほか）、シンシューイモ（埼玉県）、ゼンコジイモ（滋賀県）、ゴーシューイモ（徳島県）、イセイモ（兵庫県）、ニドイモ・ゴーシューイモ系（兵庫県淡路島）シコクイモ（新潟県・兵庫県）、ビンゴ（鳥取県）、キューシューイモ（福島県）、ヒューガイモ（奈良県）、リューキューイモ（熊本県ほか）など全国の地名に及び、いずれも名称の地からかけ離れた地方に分布している（括弧内は分布地）。

以上のように、「じゃがいも」の諸語形は命名の仕方によって、多種多様であることがわかる。

### 3. 2 調査結果・考察

まず「じゃがいも」の地図、LAS 第 150 図から作図した地図（図 1）と 2012 年調査（図 2）の地図を概観してみる。

LAS の地図をみると、淡路市、洲本市においてジャガイモが盛んに使用され

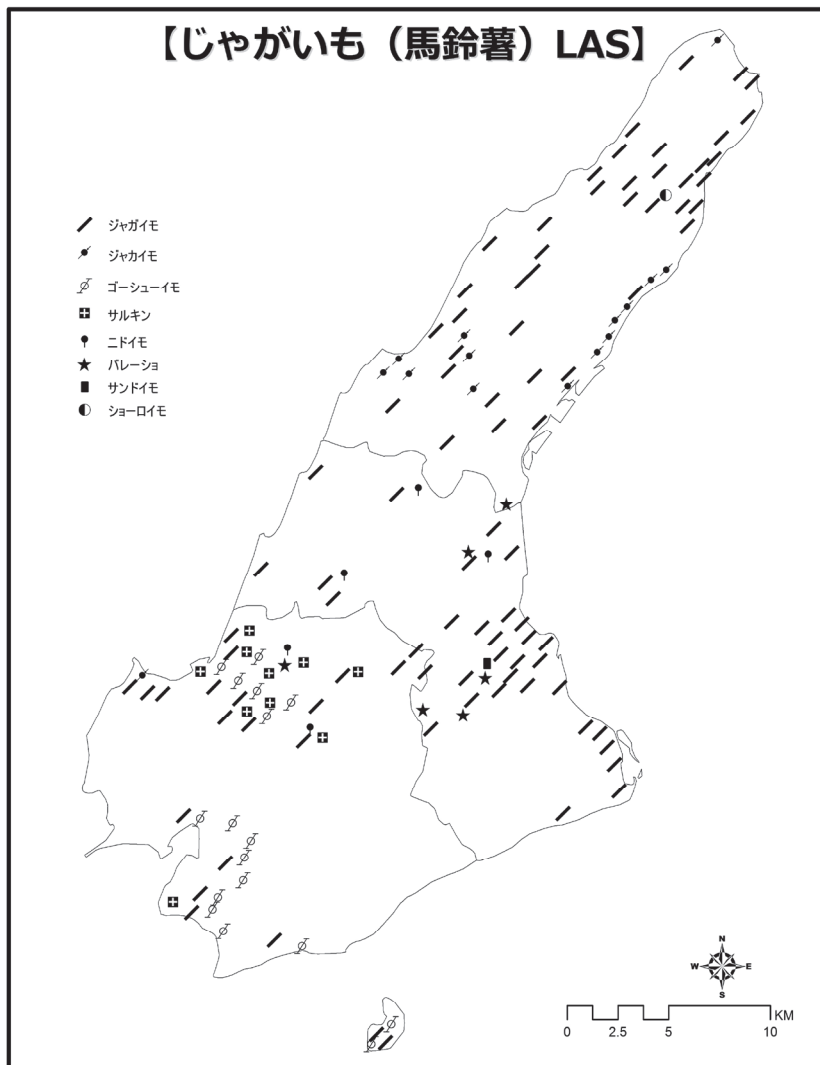


図1 LAS 第150図 (峪口作成)

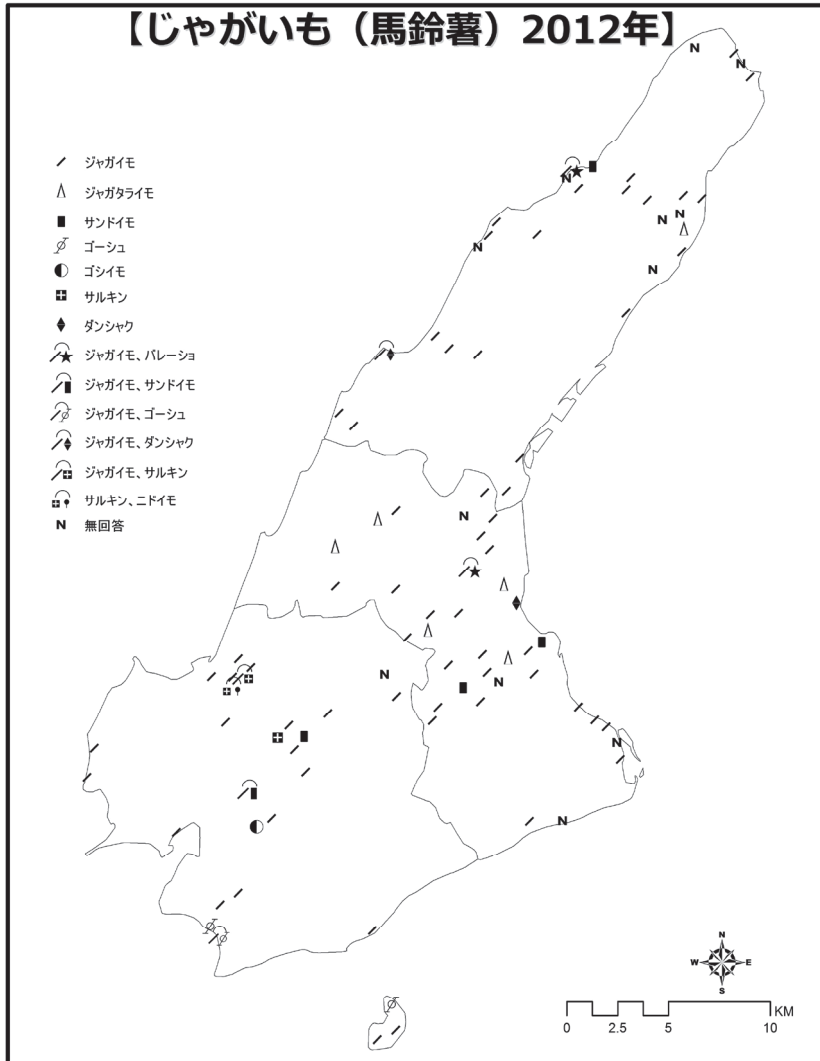


図2 2012年調査（峪口作成）

ていることがわかる。その中で、淡路市は、沿岸部の松帆と釜口から県道 28 号線を下り津名にかけてと江井崎・多賀周辺部にジャカイモがみられる。これは、ジャガイモの音声変化で、ジャカイモとなったようである。

次に 2012 年調査のジャガイモの語形は、淡路島全島に分布が及び、洲本市の方言形が若干少なくなっていた。

また淡路市北部に、ショーロイモという珍しい語形がみられた。LAS の全体図では、ショーロイモは淡路島と香川県広島県各一地点にみられた形式である。ショーロイモのショーロは、メロン+カンショ（サツマイモ）の組み合わせをし、品種改良された根菜のことをショローということから、ショーロと音声変化を起こしたと考えられる。このことから芋のことをショローイモとなったのであろう。2012 年調査においては、ショーロイモは衰退していて、分布がみられなかった。

一方、LAS において、南あわじ市西南部と沼島には、ゴーシューイモとサルキンの使用が目立つ。LAJ をみると、ゴーシューイモは、四国の徳島県・香川県に分布がみられる。四国のことばの影響を受け、淡路島南部に定着したものであろう。2012 年調査による、ゴーシューイモの分布は、ゴーシュという形式で僅かに残っていた。サルキンに関しては、LAJ には分布がみられず、LAS で淡路島西南部のみに分布が確認できた。サルキンは、昭和初期頃まで淡路島南部において使用がみられたようである。2012 年調査においても、サルキンは南あわじ市旧西淡町のみに残存していた。サルキンの意は猿の睾丸を指す俗語のことのようだ。LAS 時に、淡路島中央部の洲本市でみられた、バレーショは 2012 年調査において激減しており洲本市 1 例、淡路市 1 例のみみられた。傾向としては、バレーショがジャガイモ・ジャガタライモに置き換えられていっているようである。

次に収穫回数を表す呼称のニドイモ、サンドイモの分布をみていく。まずニドイモは、LAS では淡路島中央部に分布があり、2012 年調査では、洲本市旧西淡町のみに、分布がみられた。ニドイモに関しては、東北と近畿が主な分布領域だが、実際に「じゃがいも」の二期作を行うのは関東以西であるという。二期作は、3月の末から4月の始めにかけて植え、6月末から7月初旬にかけて取り入れる。植えてから3カ月ほどで収穫できるそうである。このように、ニドイモと同様の発想で、ニドイモのそばにサンドイモが分布しているのかもしれない。サンドイモは、LAS では洲本市のみに分布しており、2012 年調査では南あわじ市旧西淡町と洲本城付近と洲本大野地域、淡路市富島にみられた。

さらに LAJ でニドイモとサンドイモの分布を確認してみる。ニドイモの分布

は、兵庫県丹波地方、但馬地方、淡路島中央部にみられた。サンドイモの分布は、兵庫県但馬地方、西播磨にみられ、淡路島ではみられなかった。一方、LASでは、サンドイモは洲本市に使用の確認ができた。つまり、農家の生産方法により分布域が若干変化してきたのだといえる。

また「じゃがいも」の品種名である、ダンシャク（男爵芋）が2012年調査で分布を確認できた。

## 4. さつまいも（甘藷）について

### 4. 1 先行研究

次に甘藷をみていく。「さつまいも」は、アメリカ大陸原産であり、コロンブスの大航海時代の時に、まずスペインにもたらされ、やがてフィリピン、中国福建を経て1605年に琉球に伝えられた。そして、1605年の薩摩の琉球入り以降に琉球から薩摩にもたらされたという。内地に広まったのは、1615年6月14日のイギリスの商館長リチャード・コックス<sup>1</sup>の日記に自分がこの芋を琉球から長崎に持ち込み、平戸で栽培したことを記している。

また内地に栽培が普及していったことを、佐藤（1991）は、青木昆陽の努力によるところが大きいといい、昆陽は当時の全国的な飢餓を憂えて幕府に進言し、1735年に薩摩から種芋を得て今の小石川植物園に植え、さらに下総、上総、伊豆諸島に移植し、これがサツマイモの名称の起こりであり、サツマイモの名は、以後栽培の普及とともに、関東を中心としてその周囲に広がったものと指摘している。

渡来作物の名称には、その出身地・経由地を示すものが多い。その名称は出身地・伝来経路に由来し、LAJ第176図「さつまいも」の地図を大きく分類してみると、東日本から近畿・中国にかけて「サツマイモ」、九州北部から山口などにかけて「トイモ（唐芋）」、九州南部と四国の一部で「カライモ（唐芋）」、九州北西・中国・四国・能登などで「リューキューイモ」と称している。西日本が複雑で錯綜し、東日本が単純な分布を示している。

江戸中期から、様々な文献にサツマイモが出てくるようになってきた。以下、『日本国語大辞典 第二版』等を参考にまとめて示す。

- 『俳諧・手挑灯』（1745）中「九月〈略〉薩摩芋（サツマイモ）」
- 『雑俳・柳多留 - 八』（1773）「品川は山のいもよりさつまいも」
- 『物類称呼』（1775）「畿内にてりうきういもと云、東国にてさつまいもといふ、肥前にてからいもという」



- 『浄瑠璃・古戦場鐘懸の松』（1761）二「ホホホホあなたとした事が、さつまいもか何んぞの様に、是がどこにさもしい物」
- 「甘藷百珍」（1789）「八里半〔栗（九里）に近い味〕」「十三里〔栗（九里）より（四里）うまい〕」
- 『滑稽本・浮世床』（1813～1823）
  - 初・上「琉球芋（サツマイモ）なら一本十六文（そくもん）宛（づつ）もしべいといふ角（つの）を二本生しゃアがって」
  - 初・中「しかし家鴨と迄もいくめへ薩摩芋（サツマイモ）の精霊さ」
- 『雑俳・手ひきぐさ』（1824）「とっと退き下女に買はしたさつまいも」
- 和田定節『春雨文庫』（1876～1882）九「いつ何時（なんどき）薩摩芋（サツマイモ）が浪人者を引きつれて京都へ押し込んで来るかも知れぬとて」
- 松村任三『日本植物名彙』（1884）「サツマイモ リウキウイモ 甘藷」
- 夏目漱石『吾輩は猫である』（1905）一〇「坊ばは固（もと）より薩摩芋が大好きである」

LAI では現在、近畿一帯はほぼサツマイモで覆われている。しかし、上述したように、『物類称呼』をみると、かつて近畿一帯にリュウキューイモが広がっていた時期があり、それが東日本から押し寄せたサツマイモによって追われて、現在の状態になったと考えられる。現在、能登半島の先端に見られるリュウキューイモは、昔、近畿を覆っていたものの残存だといえる。

すなわち、サツマイモが琉球あるいは九州南部に渡来したときに、「唐イモ」の名が与えられ、琉球からある程度離れた土地に到達して、「琉球イモ」となり、薩摩から江戸に移入された「薩摩イモ」となったわけである。この順序で列島の西から東へ向かって分布している。

#### 4. 2 調査結果・考察

まず LAS 第 149 図の「さつまいも」から作成した地図（図 3）と、1999 年に行われた 1999 年調査の地図（図 4）と、2012 年調査（図 5）の地図を概観し、比較・考察を行う。

「さつまいも」の地図 3 枚共、全域に共通語形のサツマイモが分布している。その中で、方言形で盛んにおこなわれているのが、淡路（おもに南部）のリュウキューイモ系【リュウキイモ、リュウキューイモ、リュウキューイモ、リュキ

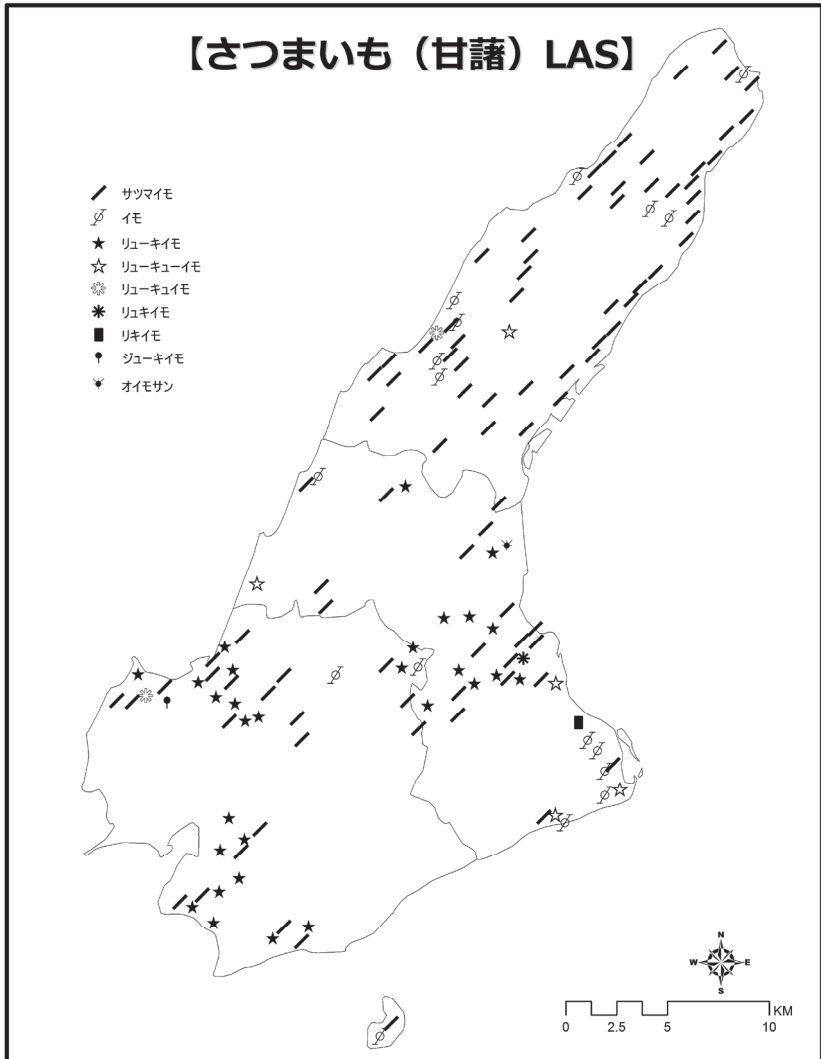


図 3 LAS 第 149 図 (峪口作成)

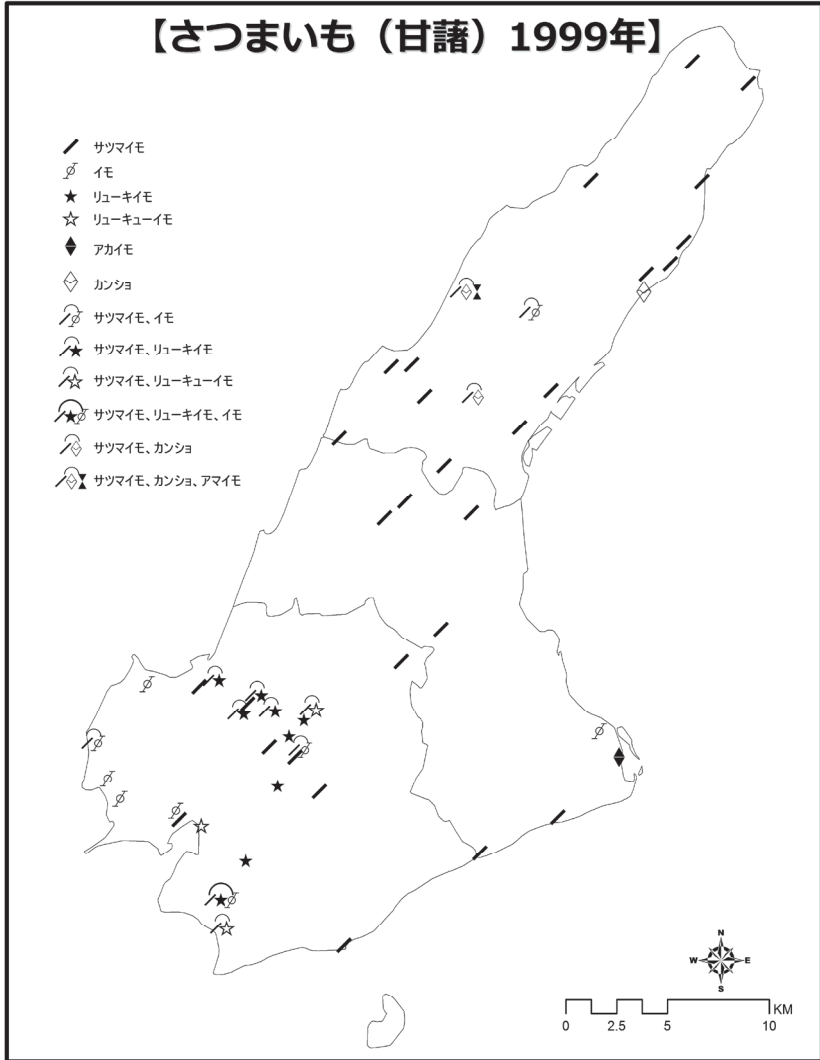


図4 1999年調査（峪口作成）

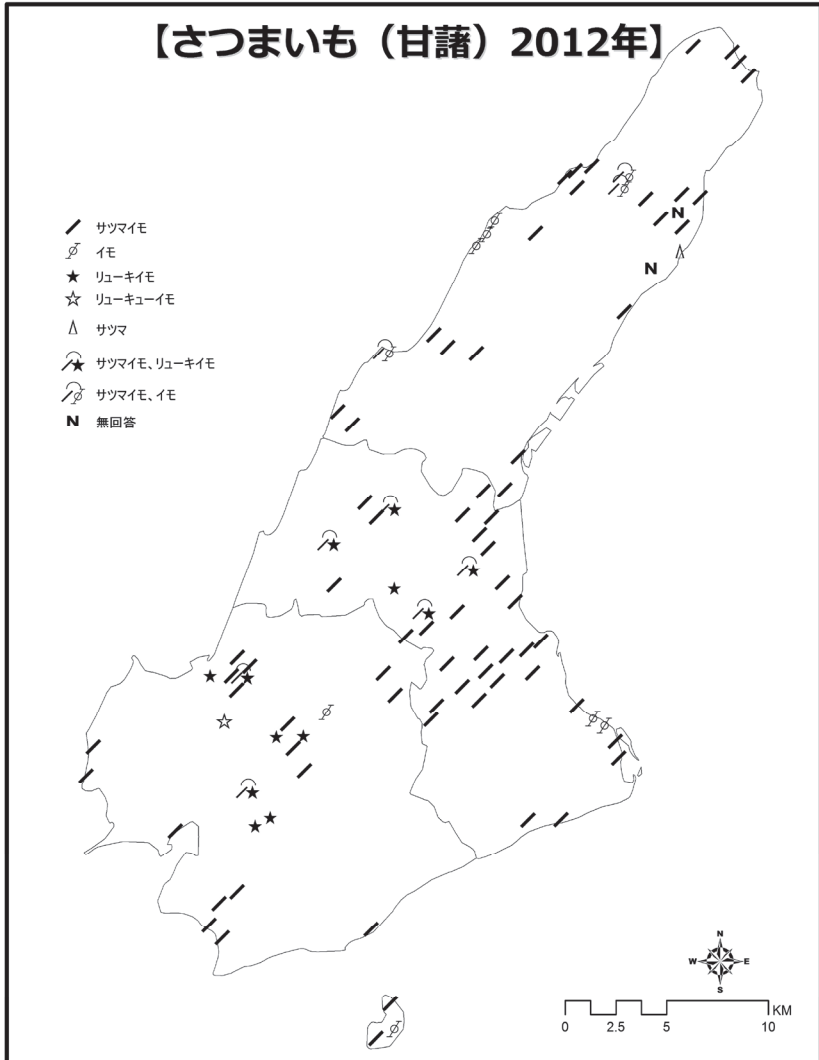


図 5 2012 年調査（峪口作成）

イモ、リキイモ、ジューキイモ】である。LAS 全体地図では、徳島・岡山県西部・愛媛島嶼・山口県下に分布が点在している。その中でも、淡路が特に分布が優勢である。藤原(1976)も指摘しているように、淡路島においては、西方、九州や、山口県下などとともに、しばしば比較的古い語形をとどめがちのようである。

このリューキューイモ系が経年変化でどのように言語変化をおこしたかをみていく。1999年調査をみると、リューキューイモ系【リューキイモ、リューキューイモ】は、やはり淡路島南部(南あわじ市)に分布がみられ、サツマイモとリューキューイモ系の併用回答も多くみられた。さらに2012年調査においても、リューキューイモ系【リューキイモ、リューキューイモ】の分布は、淡路島南部(南あわじ市・洲本市)に使用が確認ができ、1999年調査と同じく、サツマイモとリューキューイモ系の併用回答が目立った。

先行研究で上述した『物類称呼』の、かつて近畿一带にリューキューイモが広がっていた時期があるという、それが東から押し寄せてきたサツマイモに追われて、淡路島においてもリューキューイモ系の古語が淡路島南部に追いやられ残存していることが考えられるだろう。このことは上述した能登半島の例とも一致している。

次に、イモという回答を比較してみる。まず兵庫県において、イモとはどの地域に回答があるのかを、LAJをみて確認してみる。兵庫県では淡路島中央部のみに、「さつまいも」をイモと回答していた。全国的にみると、西日本を中心に分布がみられる。LASでは、淡路島全域にみられた。1999年調査、2012年調査においては、若干分布の数は減少しているものの、依然イモの分布は健在であることがわかった。

また1999年調査でみられた、カンショ(甘藷 ganshu)は、「さつまいも」の漢名のことである。そして同じく1999年調査でみられた、アカイモ、アマイモは「さつまいも」の別名であるといえる。この他、2012年調査で分布が確認できたサツマは、イモが抜け落ち短縮された別名といえよう。

## 5. さといも(里芋)について

### 5.1 先行研究

次に里芋について考察したい。「さといも」は、サトイモ科の多年草で熱帯アジア原産である。日本へは古く渡来し、平安期の辞書に「いへのいも」「いへついも」(いずれも「家の芋」の意)とし、山芋などに対して、この芋を家の近くで栽培したことによるものであると考えられ、品種が多く各地で栽培さ

れてきた。また平安期にみられた古称の残存が、広島県や長崎県の五島にエノイモという語形で残っている。

江戸初期からは、様々な文献にサトイモが出てくるようになってきた。以下、『日本国語大辞典 第二版』等を参考にまとめて示す。

- 『松屋会記』・天正一七年（1589）八月三〇日「くわし さといも、きんかん、柿」
- 『本朝食鑑三』<sup>2</sup>（1697）「芋 和名以閉都以毛（いへついも）今訓以毛或称里以毛（サトイモ）」
- 『洒落本・南江駅話』（1770）「土用見まいの里（サト）いもを一斗ばかりも上らねば」
- 『俳諧・杉風句集』（1785）「里芋の長なり畠中の庄司とやらん」
- 『小学読本』（1874）〈榊原・那珂・稲垣〉三「里（サト）芋，唐芋，八っ頭芋，蓮芋，皆茎をも併せ食ふ」
- 『日本植物名彙』（1884）〈松村任三〉「イモ サトイモ 芋」

次にLAJ第177図，第178図の「さといも」の地図は，語形が多く，二枚にわたっていた。

『現代日本語方言大辞典第3巻』の里芋の語形をまとめてみると，イモノコ【芋の子】（北海道，石川県），ハエモ【葉芋】（青森県），サドエモ・エモノゴ【芋の子】・エモ【芋】（岩手県），エモノゴ【芋の子】（秋田県），ハダイモ（福島県），サドイモ（千葉県），サトイモ（東京都，静岡県，滋賀県），チボイモ・ズキイモ（富山県），タダイモ（三重県），アカズキ【赤ずき】・オヤイモ【親芋】・タイモ【田芋】・イモメンケツ【芋明月】（滋賀県），コイモ【子芋】（滋賀県，京都府，愛媛県），エグイモ（広島県），ナツイモ【夏芋】・オードノ【里芋の一種】・メアカ【里芋の一種】，ナンキンイモ（鹿児島県），ムジウ系（沖縄県）などがみられる。

さらに，LAJ第179図の，単にイモというときに何を意味するか地図では，中部内陸部や新潟・東北以北など寒冷地でジャガイモ，それ以外の地域でサツマイモという大きな傾向のなかで，栃木・埼玉・東京・静岡・岐阜南部・富山・九州内陸部などがサトイモとなっているのが注目される。つまり，「イモの意味」の地図が三種のイモ（ジャガイモ，サツマイモ，サトイモ）の栽培状況と大体一致していることがわかる。関東から山梨・静岡にかけてと，富山や，岐阜および九州の広い領域に分布している。これは「さといも」の栽培が盛んな

地域とほぼ一致している。

また佐藤（1991）によると、サトイモという呼称は文献の上では江戸期から見られるが、この呼称は、おそらく、関東で生まれて、共通語として全国に広がったのではないかと推定し、関東や九州中央部などには、「さといも」を単にイモと呼ぶところがあるが、昔はイモといえば「さといも」のことであり、サトイモの名称が全国に広がった時期は、サツマイモやジャガイモが普及した後のことではないかと指摘している。また近畿を中心に北陸や四国に広がっているタイモ（田芋）は、分布から見て、諸語形の中で比較的新しい語形で、サトイモと同様に、山芋に対して、それが栽培植物であることに着目しての命名であるという。

## 5. 2 調査結果・考察

まず 1999 年調査の地図（図 6）と、2012 年調査（図 7）の地図を概観し、比較・考察を行う。

ここで注目されるのは、イモノコの分布である。LAJ において、イモノコの分布は北海道や東北の一部と、飛んで佐賀県と能登半島に勢力をもって分布をし、日本列島の周辺地域にみられることから、諸語形の中でも比較的古い語形だといわれている。一方、淡路島の LAJ での分布をみると、サトイモが優勢で、淡路島南部にズキイモと淡路島北部にコゾーイモ、コジイモがみられ、イモノコの分布は確認できなかったが、1999 年調査、2012 年調査において、イモノコの分布が確認できた。1999 年調査では、淡路市と洲本市の南部にみられ、2012 年調査では淡路市のみに、それぞれ分布が確認することができた。このことから、日本列島に周囲分布しているイモノコが淡路島南部に残存していることが明らかになった。

次にコイモとオヤイモについてみていく。1999 年調査では、コイモが淡路島全域に盛んであり、一方 2012 年調査では、コイモは淡路市と洲本市のみに分布がみられた。サトイモには植えた種芋（親芋）とその周りにでてくる小芋があり、コイモはこのことを指している。

また 1999 年調査でみられた、ドロイモ（泥芋）は、LAJ によると奈良県に最も分布が優勢で、大阪府と徳島県南部に分布がみられる語形である。このことから、近畿圏のことばの影響を無視できない。

次に共通語のサトイモをみていくことにする。1999 年調査においては、全域に共通語のサトイモと方言形が分布をしていたが、2012 年調査では、南淡路市は全て共通語に置き換えられていて、さらに洲本市もサトイモの分布が優勢で

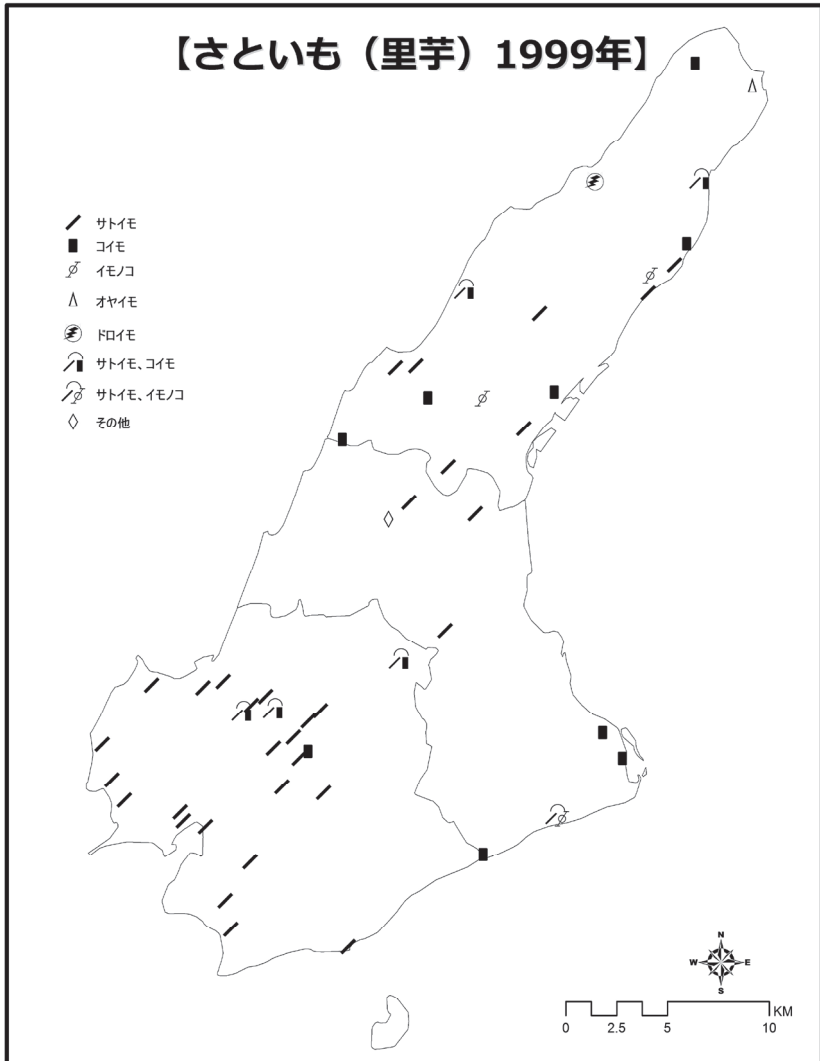


図 6 1999 年調査（峪口作成）



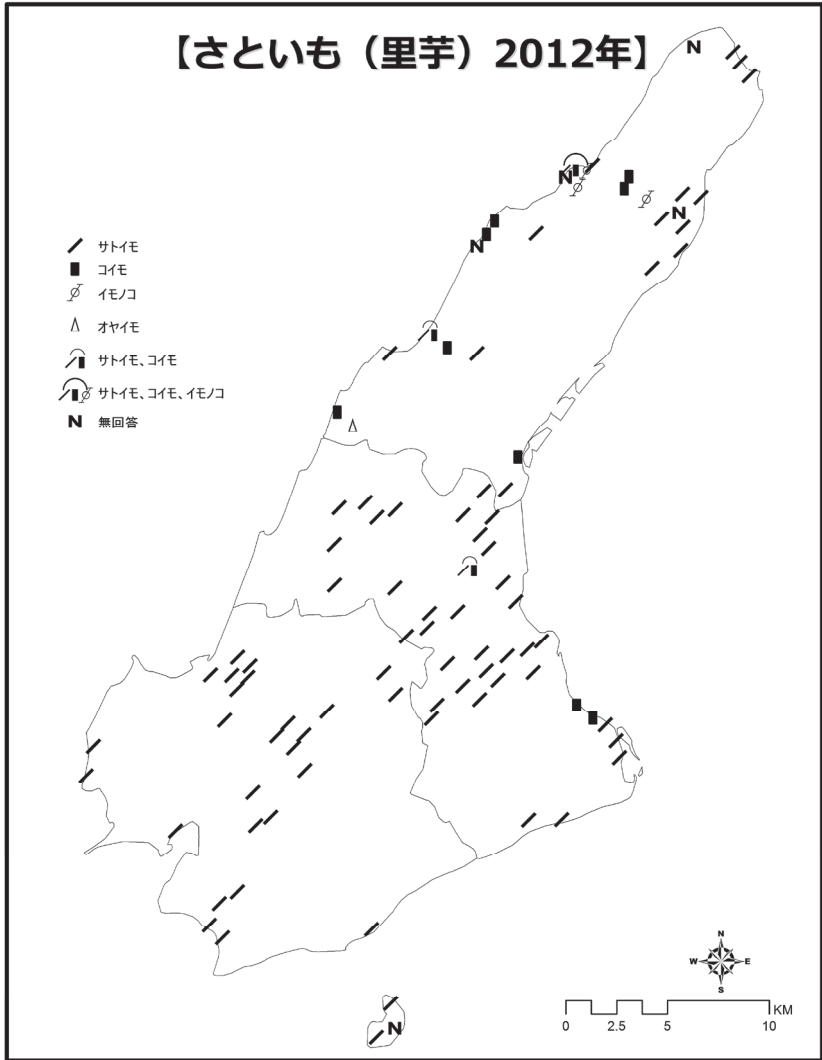


図7 2012年調査（峪口作成）

あることがわかった。つまり、共通語のサトイモが南部から押し寄せてきていることが明らかになった。このことから、言語変化はどこを起点として変化していくかは、項目により差があるのかもしれない。また今後はサトイモが北部まで押し寄せていくのかもしれない。

## 6. おわりに

瀬戸内海沿岸をはじめ、淡路島の各調査を比較することにより、淡路島における「じゃがいも」「さつまいも」「さといも」の方言語彙の変異を確認した。

藤原(1976)が指摘するように、淡路島は古語が残存しやすい地域であることは、確かであることが追認できた。また語彙により、共通語化が進行中の語彙と、依然として伝統的語形が残存している語彙とに分けられることがわかった。今後は、瀬戸内海域をフィールドにさらに言語変化の過程を探ってきたい。

### (付記)

本研究は、日本学術振興会特別研究員奨励費によるプロジェクト「GISによる言語地理学研究—瀬戸内海地域をフィールドとして—」の成果の一部である。

## 参考文献

- 楳垣実(1962)「近畿方言の区画」『近畿地方の総合的研究』三省堂  
 鎌田良二(1979)『兵庫県方言文法の研究』桜楓社  
 岸江信介・村田真実・峪口有香子・曾我部千穂・森岡裕介・林琳編(2013)『淡路島言語地図』徳島大学日本語学研究室  
 国立国語研究所編(1984)『日本言語地図第4集』国立国語研究所  
 佐藤虎男(1990)『小豆島と対岸要地の方言事象年層分布図集—『瀬戸内海言語図巻』の25年後追跡調査—』大阪教育大学方言研究会  
 佐藤虎男(1999)「小豆島を中心とした内海東部域の方言の動態」『瀬戸内海圏環境言語学』武蔵野書院  
 佐藤亮一(1991)『方言の読本』小学館  
 佐藤亮一(2002)『方言の地図帳』小学館  
 沢木幹栄(1962)「物とことば」『日本の方言地図』中公新書  
 小学館国語辞典編集部ほか編『日本国語大辞典 第二版』小学館  
 尚学図書編(1989)『日本方言大辞典』小学館  
 東條操(1971)『全国方言辞典』東京堂出版

- 兵庫県高等学校教育研究会国語部会編（2003）『兵庫県ことば読本』東京書籍
- 新村出（1944）『外来語の話』新日本図書のち講談社文芸文庫
- 禰宜田龍昇（1986）『淡路方言の研究』神戸新聞出版センター
- 平山輝男ほか編（1992）『現代日本語方言大辞典』明治書院
- 藤原与一（1996）『日本語方言辞書-昭和・平成の生活語-』東京堂出版
- 藤原与一（1974）『瀬戸内海言語図巻 上下巻』東京大学出版会
- 藤原与一（1976）『瀬戸内海域方言の方言地理学的研究-『瀬戸内海言語図巻』  
付録説明書-』東京大学出版会
- 藤原与一（1987）『瀬戸内海方言辞典』東京堂出版

---

<sup>1</sup> 江戸初期に日本の平戸にあったイギリス商館長を務めた人物である。在任中に記した詳細な公務日記「イギリス商館長日記」（Diary kept by the Head of the English Factory in Japan: Diary of Richard Cocks, 1615-1622）は、イギリスの東アジア貿易の実態や日本国内の様々な史実を伝える史料となっている。

<sup>2</sup> 庶民の日常食糧について解説した本草書のことである。